

第25期第15回常任理事会議事録

日時：平成2年2月28日（水）13：00～17：00

場所：気象庁総務部会議室（8階）

出席者：浅井，岡村，荒川，竹内，河村，安田，
中村，古賀，木田，能登，村上，村松

議事

A. 報告事項

1. 第15回常任理事会議事録は一部修正の上承認された。

2. 各委員会報告

「庶務」主なものは次のとおり

	期日	件名	主催団体
・共催承認	4月5日	海洋工学シンポジウム	海洋工学コンファレンス
・協賛承認	7月25日	第22回乱流シンポジウム	日本流体力学学会
・転載許可依頼	2件		

・日本学術会議第15期会員に係わる学術研究団体の登録通知の案内があった。申請締切6月30日「会計」12月と1月の収支報告があった。

「天気」

・2月号の内容と3・4月号の予定の報告があった。

・「天気」の印刷は三報社に落札した。

「気象研究ノート」

・170号から1年分の印刷契約とし、電子出版方式も取り入れられるよう仕様書の検討している。

「気象集誌」

・Vol. 68 No. 2の内容報告があった。

・1月の電子掲示板掲載リストが提示された。

・2月28日に行った気象集誌の入札説明会で、仕様書に新しく紙質の向上と印字密度のアップを入れた旨の報告があった。

「国際学術交流」

・平成2年上半年期の旅費補助金の申請受付中である。

「教育と普及」

・今年の夏季大学の会場として気象庁の「お天気フェア」会場の「船の科学館」を検討したが、会場として適当でないことがわかった。今年も気象庁で7月24日から行う。

「講演企画」

- ・3月15日に委員会を開き春季大会のプログラム編成を行う。また、セッションについて全体を見直す。
- ・シンポジウムのテーマは大会実行委員会と協議して決めることになった。「地球システム」を予定し、講師について交渉している。

「総合計画」

・国際地球物理金沢会議について

- 1 「天気」3月号に紹介記事を掲載する
- 2 金沢での受付は現地気象学会員の協力をお願いしている
- 3 講演申込み状況は現在の所不明である。

B. 審議事項

1. 会員の新規加入

新規加入19名，退会13名が承認された。

2. 平成2年度学会賞・藤原賞について

藤原賞担当理事から学会賞・藤原賞推薦合同委員会での審議経過及び候補者の推薦の報告があった。推薦理由の一部手直しが提案され，担当委員長に了解をとることになった。規定に基づいて，全理事の無記名投票を行う。

3. 会員の種別と会費の扱いについて

庶務担当理事から定款・細則の第2次改訂案に関する全理事への意見照会の結果が，報告された。次に，定款及び細則の改訂案の細部について審議が行われ，一部改めることになった。今後文部省と調整し，第1次案と大幅に変わっているので，再度全理事に対して総会議案に提案することの賛否投票を行うことになった。

4. 平成2年度の予算案・事業計画及び元年度の事業報告について

担当理事から資料の説明があり，主として前回資料に追加された予算項目について検討が行われた。

5. 気象研究ノートの付録としてフロッピーディスクを付けることについて

気象研究ノートの理解を助けるものとして，プログラムデータ等を入れたフロッピーを付録することについて編集委員会で検討している旨担当理事から説明があり，フロッピーがなくても独立で読

んで理解できるか、保管上の問題、価格、郵送等について審議された。

結論として、新しい試みとして編集委員会の意志に任せることとした。

6. 「山本・正野論文賞」推薦委員会について

今年度は、暫定的に旧「山本賞」の担当理事が、新しい賞の推薦委員委員長を担当することとし、委員の選出も一任することにした。

次期理事会からは理事職務分担の際、「山本・正野論文賞」担当理事も決めることとする。また、「山本・正野論文賞」設立の際の理事会覚書を委員会に渡す。

7. 担当理事の変更について次のとおり承認された。

「教育と普及」

新 古賀 晴成（気候変動対策室）

旧 安田 延寿（気象大学校）

編集後記：本誌がお手元に届く頃には北海道でも桜の便りが聞かれる頃ではないでしょうか。今春は各地で桜の開花の早い記録が更新されています。東京では今年1990年のソメイヨシノ開花は3月20日（平年3月30日）、満開は3月26日（同4月7日）で、これまで最も早かった昨年1989年を上回る早さでした。この4年続きの暖冬と、「地球温暖化」が政治のキーワードにまでなったこの世界情勢との「偶然」の符合にわれわれは何を読みとるべきなのでしょう。

さて、小生の編集委員会での仕事は、3か月に1回の本誌の校正です。現在は3の倍数の月号を担当しています。校正は小生のような編集委員会事務局員の他に、著者と、編集書記のH氏の計3人で行われます。表の数値や文献のページに1つ誤植が残っただけで、多くの人に迷惑を及ぼすわけですし、なにより貴重な研究の成果である論文に、大きな傷を残すことにもなりかねません。毎回気を引き締めて取り組んでいます。

小生のところに校正が回って来るときには、原稿の他に著者校正もあわせて付いています。皆さん自分の原稿ですから、非常によく見ておられるのですが、中には見落としただけで、思わず投稿の熱意を疑いたくなるような著者校正もたまにあります。多忙で大変ということもあるのですが、「著者校正で直されていない部分は、

誤植と見えても著者が認めたものであり、そのまま掲載すべきである」という理屈も成り立つわけで、是非しっかり見ていただきたいと思います。とあって、原文を手直しするのはもちろん御法度ですが。

最後にふだんからの感想を思いつくまま書いてみます。参考にしていただければ幸いです。◎校正は1人でやるべきである。2人での読み合わせ校正は百害あって一利もない。2人が校正に従事できるなら、2人で別々に行えば転じて最良の方法となる◎表題、著者名、頭見出しをまず最初に見るべきである。特に頭見出しは原稿にないせいか、非常に見落としが多い◎文献の引用方法は雑誌によって違うが、「天気」にも投稿規定で決めたやりかたがある。これが守られていない原稿は編集書記が直して印刷所に渡しているが、投稿段階で規定を守っておくべきだろう。表、図の番号の付け方も同じ（「図1」、「表2」ではなく「第1図」、「第2表」）◎眠たくなるような文章は、なぜか誤植が多い（眠くなるのは浅学の小生の責任で著者の罪ではないとの声あり。）また、読みやすい字、ワープロ原稿はやはり誤植が少ない。

これからも「緑の下の赤鉛筆持ち」として努力していきたいと思います。皆さんの御協力をお願い致します。

（あきら）